
ドラゴン・バスタード

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴン・バスタード

【Nコード】

N26310

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

伝説の剣士シンは、かつて世界を闇に閉ざした暗黒竜を見事、打ち倒した。しかし20年後。突如として現れた暗黒竜二世により、世界は再び闇に包まれつつあった。

シンの弟の息子であるレイは、その血筋から、人々の希望となるよう求められることとなる。果たして彼は人々の希望となりえるのか？

作：青木弘樹

レイ…主人公・18歳

レイナ…レイの母

グレンド…兵士団・団長

カイル…盗賊

飛鳥^{あすか}…謎の女性

かつて世界を闇に閉ざした暗黒竜を打ち倒し、世界に平和を導いた男がいた。

その名は伝説の剣士シン。

しかしその20年後の現在、突如として現れた暗黒竜の子供、暗黒竜二世は、再び世界を闇に閉ざそうとしていた。人々は絶望に包まれた。

伝説の剣士シンは、暗黒竜との戦いで深手を負い、暗黒竜を倒した一週間後に、息を引き取っていた。

シンには弟がいた、その名もレン。

レンもなかなかの剣士だったが、一年前、不治の病を患い、この世を去っていた。

もう希望はないのか…今度こそ世界は終わるのか…そんな時、王様の下にある情報が届いた。

「王様！伝令であります」

ひとりの兵が、慌てて王様の下へ走ってきた。

「なにごとか、騒がしい」

「失礼しました。いま旅の商人がある情報を持ってきたのであります」

「どんな情報だ？」

「はっ。伝説の剣士シンにまつわる情報でございます。詳しくは商人本人の口から王様に伝えたいと申しております」

「そうか。よし、連れてまいれ」

「はっ！」

旅の商人だという男は、兵に連れられ、王様の下へとやってきた。

「王様、ごきげんうるわしゅうございます」

「ふむ」

「私は旅の商人のコーネルトと申します」

「そうか。して…どんな情報じゃ？まさか伝説の剣士シンが生きていた、などという、たわけた情報ではあるまいな？」

「いいえ、そうではありません」

コーネルトは少し笑った。

「剣士シンは死にました。そしてその弟レンも…残念なことです」
「…」

「しかし王様、レンには息子がいるのです」

「なに？それは初耳じゃ！」

王様は立ち上がって驚いた。

「私も最近知りえた情報です」

「して…どこにおるのじゃ？」

「はい。ここゴールドランド城から北へ行った村、ノボス村にいる
とのことです」

「村？北に村などあるのか？」

「はい。小さい村なうえ、森に囲まれているので、その存在を知る者はごくわずかのようです」

「そ、そうか…。して、そのレンの息子の名前は？」

「はい。レイといいます。年は18。母親と二人で暮らしていると
の事です」

「レイか…」

王様は少し嬉しそうだった。

「伝説の剣士シンの血筋とあらば、国民の希望となりえるかもしれませんが。兵を派遣してはいかがでしょうか？」

「うむ。コーネルトよ、朗報じゃ。さつそく兵を行かせよう。グレンドよ！」

「はっ！」

グレンドとは、この城の兵士団の団長である。得意な武器は槍だ。

「さつそく兵を5名招集し、ノボス村へ向かってほしい」

「分かりました。ただちに！」

グレンドは急いで用意をした。

「コーネルトよ、大儀であったぞ。何か褒美を与えねばな」

「いえ王様、私はそのようなつもりで来たものではありません。私は旅の商人。魔物がおってはいつ旅の途中、襲われるかもしれませぬ。すべては世界の平和のためでございます」

「そうか。確かにそうだな。しかし何も褒美を与えんというのも申し訳ない。今晩は我が城の客室に泊まっていくがいい」

「分かりました。心遣い、感謝いたします」

「うむ。ゆっくり休めよ」

「ありがとうございます」

コーネルトは客室へと案内された。

「レイか…。人々の希望となってくれば良いが…」

一時間後。

「では、王様、行ってまいります」

「うむ。気をつけてな。外では魔物に出くわすこともあるやもしれぬ。気を引き締めて行けよ」

「はは！」

グレンドは5人の部下と共に、北にあるというノボス村へと向かった。

「頼んだぞ…グレンド…！」

王様は心の中で祈っていた。側近たちも、かすかな希望を胸に抱

いた。

今日は天気もよく、空は晴れ渡っていた。こういう日は魔物はあまり現れない。特に昼間は現れない。たとえ現れたとしても、グレンドたちも伊達で兵士をやっているのではない。そう簡単にはやられることはない。

数時間が過ぎた。グレンドたちは森に差し掛かった。

「皆のもの、よく聞け。視界の悪い森では魔物が強襲してくる可能性も高い。隊列を乱さず、慎重に進むのだ」

「はは！」

グレンドと5人の部下は、これまで以上に慎重に足を進めた。草や枝を、各々の武器で払いながら、ゆっくりではあるが、確実に進んだ。

途中、野生の動物を見かけることもあったが、襲ってくることはなかった。そして、1時間ほどが過ぎたころ、木々の隙間から、村のような景色が見えてきた。

「団長！」

「うむ。どうやらあの商人の情報は嘘ではなかったようだな」

グレンドたちは見渡した。そこには小さな村があった。家は5〜6軒。人影が数人見えた。

村人のうちの一人が、グレンドたちに気づいた。

「……」

こちらをじっと見ている。グレンドたちはその人物に近寄った。

「あんたら……」

村人は警戒しているようだった。

「突然の訪問、申し訳ない。私はゴールドランド城、兵士団・団長グレンドだ」

「ゴールドランド……」

村人は、どうやらゴールドランドの事は知っているような感じだった。

「実はこの村に伝説の剣士シンの親族で、レイという若者がいると

聞いてやってきた」

「…」

「レイという若者はいないか？」

他の村人も集まってきた。

「レイなら…今、森に木を取りに行っているよ」

「ほう、そうか」

レイという名の若者は、確かにいるようだ。グレンドたちは少し喜んだ。

「しかし…今あんたこう言ったよな？レイが伝説の剣士シンの親族だと」

「ああ。シンの弟レンの息子だ」

「本当かい？そんな話、初めて聞いたよ」

「…」

あたりは少しざわついた。

「あのレイがねえ…あっ」

その時、レイらしき人物が数人の仲間と共に帰ってきた。

「ふう。ただいま」

「…」

グレンドはレイと思わしき人物を見た。体つきはがっちりしている。しかし顔は優しそうな感じだった。いや、どちらかというところ頼りなさそうな感じだった。当たり前前かもしれないが、かつて見たことのある伝説の剣士シンの面影はなかった。

「君がレイかね？」

「はい…そうですが…あなたは？」

「私はゴールドランド城、兵士団・団長グレンドだ」

「…」

レイは、なんとなく嫌な予感がしていた。

「実は…」

「待たれい」

そこに、村長らしき人物が現れた。

「グレンドとやら、話なら私が伺おう。レイ、お前もくるのじゃ
「え？」

「他の者は仕事に戻れ。ささ、早く」
「わ、分かりました」

「…」

どうやら村長だけは、レイの素性を知っているようだ。グレンド
たちとレイは村長の家に向かった。

「レイ…やはりとうとうこの日が…」

ある家の中から、その様子を心配そうに見つめる女性がいた。レ
イの母親だ。

村長の家。

「ついにこの時がきたようじゃの…」

村長は神妙な顔で話し出した。

「暗黒竜二世の噂を聞いたとき、いつかこの日が来るとは思ってい
た」

「…」

皆は黙っていた。レイはうつむいていた。

「レイよ、これは運命なのだ。伝説の剣士シンの後を継ぐのはお前
しかおらぬ。世界のため、どうか戦ってはくれんかの」

「そんな…いきなりそんなこと言われても…」

レイは困っていた。

「レイよ、剣の修行はしたことはないのか？」

グレンドが聞いた。

「子供のころ、父と共に少しありますが…」

「そうか。しかし案ずるな。私たちがしっかり面倒を見る。お前な
ら、シンの後を継げるさ」

グレンドは、弱気なレイを励ますように言った。

「そんなこと…言われたって…」

「暗黒竜二世が本格的に動き出す前に、一日でも早く動かねばなら

んだ。頼む」

グレンドは必死だった。

「…」

しかしレイは決心がつかなかった。当然のことだが。

「レイ…」

その時、レイの母が現れた。

「母さん…」

「レイ…あなたの気持ちは分かるわ。私もあなたを行かせたくはない。けれど…世界がこのまま闇に包まれるのを黙ってみているわけにもいかないのですよ…」

「母さん…」

「お母様でいらっしやいますか？」

「はい」

「はじめまして。ゴールドランド城、兵士団・団長のグレンドと申します」

「はじめまして」

「お母様には酷なお願いとは思いますが、息子さんを預からしていただきたいのです」

「ええ…仕方ありませんわ。つらいですが…」

「母さん…」

レイは母の言葉に少し驚いたが、それだけ世界が危ないということも、同時に察知した。

「そつだ。お母様も一緒にくるといい。ゴールドランド城で面倒を見ますよ」

「本当ですか？」

「…」

レイの母は嬉しそうだった。レイも、母と一緒にならとりあえず行ってもいいと思い始めた。

「うむ。今日はもう日も暮れる。明朝、出発するがいい」

村長が笑顔で言った。

「ありがとうございます」

グレンドは深々と頭を下げた。

次の日。

グレンド団長、部下の兵士たち、レイ、レイの母親は支度を整えていた。

レイはまだ内心迷っていたが、母の期待にこたえたい、その思いが強かった。母にはこれまでいろいろ面倒をかけた。母がいなかったら、この村を出ることはなかったであろう。

そして、出発の時は来た。

「うむ。それでは気をつけてな」

村長が言った。村人たちも集まっていた。

「無理するなよレイ」

「うん。ありがとうございます」

「レイナさんも、気をつけてな」

「ありがとう」

レイナとはレイの母親の名前だ。

「それでは村長、失礼いたします」

グレンドは頭を下げた。礼儀正しい男だ。

「うむ。よい結果を期待しているぞ」

グレンドたちは、出発した。目指すはゴールドランド。

グレンドたちは特に支障もなく森を抜けた。

「みんな、森を抜けたぞ。しかし油断はせんようにな」

「はい」

グレンドは、部下たちの信頼も厚いようだ。

「レイナどの、大丈夫ですか？もしお疲れならここで一休みしていいか？」

「いえ、大丈夫よ。ありがとうございます。レイは大丈夫？」

「僕は平気だよ、母さん」

「そう。なら、このまま行きましょう」

「うむ。承知した」

グレンドたちは、ゴールドランドをひたすら目指した。

そして時間は過ぎ、かすかにゴールドランドが見えてきた。が、しかし…

「ん？」

様子が変だ。ゴールドランド城から、煙が上がっているように見える。

「まさか…」

城に近づくと、グレンドたちには、はっきり見えてきた。

「だ、団長…」

「城が…城が燃えている…！」

そう。ゴールドランド城は、炎に包まれていた。

「こんなことが…！？」

人の悲鳴も、かすかに聞こえてきた。

「グレンドさん…」

レイは不安げな表情だった。

「団長…いそぎましよう！」

「うむ！」

しかし、その時！

”ブオオオオ！”

突然、巨大な火の玉が数発、グレンドたちに降り注いだ！

「うおっ！」

グレンドはレイを、部下の兵士がレイナをかばいながら、とっさに火の玉をよけた。

しかし

”ドン！ドン！ドン！ドン！”

「うわああ！」

「ぐわああ！」

他の4人の部下たちは火の玉をまともに喰らってしまった！

「きゃあああ！」

レイナは思わず叫んだ。4人の部下たちは丸焼けになってしまった。

「お前たちー！」

4人の部下たちは、言葉もなく、その場にくずれた。

「…」

レイは震えていた。

「だ、団長…」

「…」

グレンドも一瞬立ち尽くしたが、団長である自分が冷静さを失うわけにはいかない。グレンドは顔を引き締め、言った。

「急ぐぞ、マッシュュ！」

「は、はは…」

「レイ、レイナどの、悪いがここからは少し走っていただく。よいか？」

「え、ええ…」

レイナはうなずいた。

「…」

レイは震えていた。

「レイ…」

レイナはレイの手を取った。

「レイ、行くわよ」

レイナは真剣な表情になった。

「わ、分かったよ母さん」

レイはうなずいた。母は強し、といったところか。

グレンドたちは走った。

そして、その様子を空から見ている何者かがいた。そう。巨大な火の玉はこいつの仕業だった。こいつはいったい何者なのか…？

「これは…」

城の目の前まで来て、あらためてグレンドたちは啞然とした。

城も、城下町も、なにもかも破壊されていた。人も大勢倒れていた。

「そんな…」

グレンドたちは立ち尽くした。

「これはいつたい…」

グレンドは槍を構えた。敵がいる予感がしたのだ。その時、

「だ、団長…」

ひとりの傷だらけの男が、グレンドに近寄ってきた。

「ベルガー！」

ひどい傷だった。足を引きずり、もう助かりそうにない。

「団長…」

ベルガーは倒れこんだ。

「ベルガー！しつかりするんだ！」

「いったい何があつたんだ！？」

マッシュが聞いた。

「今朝、突然城が大爆発を起こし、魔物たちがやってきたのです…」

「！」

「応戦はしましたが…まだ魔物が残っているかも知れません…団長

…気をつけてください…」

「ベルガー！」

「それと…これを…」

ベルガーは剣を差し出した。

「これは…？」

「地下の宝物庫に保管してあった…オリハルコンの剣です。で、伝

説の剣士シンが使っていた…」

「ベルガー！」

「これだけは…これだけは守らなければと思い…持ってまいりまし

た…」

「ベルガー…」

マッシュは泣いていた。

「団長…どうか…」
ベルガーは息をひきとった。
「ベルガー…！」
しかしその時、
「へっへっへ…」
トルル系の魔物が現れた。鉄のこん棒を持っている。
「まだ人がいたのか…」
魔物は笑っていた。
「きさま…きさまがベルガーを…!？」
マツシユは斧を構えた。
「だったらどうだと言うんだ？」
「おのれ…うおおお！」
マツシユは魔物に襲い掛かった。
”ガキン！”
マツシユの斧は、魔物のこん棒に食い止められた。
「！」
斧にはひびが入ってしまった。
「お前も死ね！」
魔物は、その図体とは裏腹に素早い動きで、こん棒をマツシユに叩きつけた。
”ガツシイ！”
「マツシユ！」
マツシユは倒れこんだ。
「…」
三人は声も出なかった。
「うっ…」
マツシユは虫の息だった。もう助かりそうにない。
「さあて…次はどいつだ？」
魔物はこん棒についた血をなめた。
「マツシユ…」

その時、静かな怒りと共にグレンドが立ち上がった。

「！」

レイはその表情に、一瞬、魔物よりもグレンドのほうに恐怖を感じた。

「きさま…断じて許さん！」

グレンドは槍を構えた。よく見るとその槍は、普通の槍にはない迫力をかもしだしていた。

「へへ…人間などが俺様にかなうもの…」

「ふん！」

グレンドはものすごい早さで魔物に向かい、鉄のこん棒めがけて槍を突き刺した。

「なにい！？」

”グガガア！”

魔物のこん棒は砕け散った。

「ば、ばかなあ！？」

さらに止まることなく、グレンドは槍を魔物めがけて突き刺した。

”ドシュ！”

「ぐわあああ！」

槍は魔物の心臓のあたりに突き刺さった。紫色の不気味な血しびきが舞う。

”ズダーン”

魔物はその場に倒れこんだ。

「す、すごい…」

レイは震えていた。

「ふう…」

グレンドは槍を軽く振った。魔物の血をふり払うためだ。

「ぐぐぐ…」

魔物ももだえていた。

「その槍は…いつたい…？」

「冥土の土産に教えてやろう。この槍こそ、伝説のポセイドンの槍。

きさまなど砂より簡単に貫くことができるわ」

グレンドは、はき捨てるように言った。

「ぐぐぐ…」

魔物は目を見開いていた。

「ひとおもいに殺してもいいが、きさまのような化け物は、そこで
そうやってもだえ死ぬがいい」

普段は静かなる男グレンド。その内に秘めたる闘志は熱い。

「ふふふ…見事だな。だが、あまり油断していると…」

その時！

” シャツ！”

なんと、どこからともなく黒い槍が飛んできた。そしてその槍は
レイの母、レイナの体に突き刺さってしまった。

「ああ！」

「しまったあ！」

静かに倒れこむレイナ。

「うっ…レイ…」

「母さん！母さん！」

「くそ！どこだ！」

黒い槍が飛んできたほうを見ると、ガーゴイル系の魔物がいた。
剣を持っていた。

「おっと悪い悪い。手が滑っちゃった」

魔物は不敵な笑みを浮かべていた。

「くっ！」

グレンドは槍を構え、戦闘体制に入った。

「母さん！母さん！」

母のそばで必死で母の名を呼ぶレイ。レイナは目をつぶっている。
息はしているが、意識はほとんどない。

「そんな…母さん…」

レイは涙を流した。

「…」

グレンドは、レイナの事も気になるが、今は魔物に集中しなければならぬ。横目でレイナの様子を見ながらも、魔物に集中した。「けけけ、俺様をあんなデブと一緒にだと思ったら痛い目にあうぜ」魔物は剣を持っていないほうの手をかざした。

「そりゃ！」

すると、手から吹雪のようなものを発した。

「くっ！魔術か！」

グレンドはとっさに避けた。

「けけけけ……」

「くそ……」

これではうかつに近づけない。

「死ね！」

魔物は剣で切りつけてきた。

「くっ！」

グレンドは槍で剣を防いだ。しかし、

「取った！」

魔物はもう一方の手で、一瞬にしてグレンドの両腕を凍らせた。

「しまった！」

絶体絶命のピンチ。

「くたばれえ！」

しかしその時、

”ズバア！”

「！？」

なんとレイがオリハルコンの剣で魔物を切り裂いた。

「ぐわあああ！」

魔物は倒れこみ息絶えた。

「はあはあ……！」

レイは震えていた。膝を落とし、剣を地面に置いた。

「レイ……」

グレンドは、とりあえず燃えている何かに近づき、凍りついた腕

を溶かした。

「母さん……」

レイは母のほうに近づいた。

「レイ……」

「!?!」

「レイ……どうか強く……そして……世界を……平和に……」

「母さん……」

「……」

レイの母レイナは息絶えた。

「母さん！母さん！」

レイは母を強く抱きしめた。

「……」

グレンドはしばらく黙って見ていた。

一時間後。

グレンドは城下町の端のほうに三人の遺体を埋めた。

「……」

もう魔物の気配も、そして人間の気配もなかった。

「……」

立ち尽くす二人。

「レイ……」

グレンドが何かを言おうとした時、レイは言った。

「グレンドさん……俺は決めた」

「?」

「暗黒竜二世を倒し、世界を平和にする！」

オリハルコンの剣を握り締め、レイは今こそ決意した。

「分かった」

「これが運命なら、受け入れるよ。グレンドさん！」

「うむ。私も協力しよう。世界の平和のために！」

こうして、レイの運命の戦いが、今はじまった。

UNU

(後書き)

その5まであります

よろしくおねがいたします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2631o/>

ドラゴン・バスタード

2010年10月11日19時55分発行